

創立十周年記念誌「寄稿・旧職員」より

長崎南高十周年を祝して 初代校長 古川 憲 介

開校十周年を迎えられる校長先生始め職員・生徒のみなさん、それに、ご父兄の方々にはもとより、これまで、「長崎南高」にかかわってこられた皆さん、ほんとうに、おめでとうございます。心から、お祝いの言葉を申し上げます。

——〈中略〉——

「十年一昔」という言葉があります。皆さんが苦しみながらも走りつゝ、けてこられたこの十年は、「長崎南高」という、永く生きつゞけるであろう生命体の基盤を作るにふさわしく、輝やかしい一区切りでありました。そしてこのことは、これまでの南高の皆さんが、「十年一日」の如く培かいて育ててこられた苦しい努力の成果として、胸を張って誇られて良いことと思います。

私はここで、今もって忘れ得ない言葉を思い出します。それは、私が学校を卒えて、私なりの意欲をもって初めての学校に赴任する前日、何かと指導を受けようと訪ねた人の言葉であります。「私は、君のこれらの仕事のために一言だけ言っておこう。学校の教育は、指導する人の教えに始まる。これは確かなことだ。が、その人の生命は僅に五十年、しかし、そこに教え、学ぶ教師と生徒の、教え、学ぶ精神と、姿勢の立派さがつみかさねられて風をなすとき、その風は、生命はないものと思える校舎に、又、校庭の庭木の中に匂いとして残り、教師の言葉以上の教育をするものだ。私は、ケンブリッジに学んでつくづくその感を深くした。校舎は無言の教育をするものだ。」そして最後に、「君、校舎は絶対に鉄筋で作るべきだよ」と。私は大きな感銘を受けました。

皆さんの一日一日の実践、一日一日の言動の積み重ねの中に、一本通った、動かし難い、より高くとのあこがれを忘れぬ精神の存在こそが、良い校風を築くものと思います。そしてそれが、つぎつぎとそこに学ぶ者に体感として受け継がれ、遺されて風をなすとき、一歩校地に足を踏み入れる者に、襟を正させる薫りともなつてゆくものでありましょう。

皆さんを取り巻く周囲が、真実は底の浅いものではありませんが、一応、豊かな世界、何でも自由にやれる世界でありますだけに、更に加えて、皆さんの時代が、何でもやって見たいという、奔放なまでに意欲的な青春の時代でありますだけに、この価値高い目標達成のための道程は、苦しい、しかも、平凡なまでの毎日の努力以外の何物でもありません。

私たちがえがく理想の姿は、すべて、あるいは到達しえないものかも知れませんが、然もなお、いつの日にか、自分の手と、より高く、より近くと、自らを鞭打つ努力の姿こそが、正しく人生の姿かと思えます。

学校というものが、半永久的生命体であると思えますだけに、又、自分一人だけのものではないと思えますだけに、その生命を培う血の一滴として、自分を認識し、ほしのままに私欲に翻弄されることなく、本来自由であるべきものも、目的のために自ら取捨しての、たゆまない努力こそが、生きた愛校心であり、同時に、皆さん自身を高める唯一の道であるかと思えます。

勉強はあくまで皆さんの本分であります。そして、健康はあらゆる活動の根源であります。集中する緊張と、意欲を培う適当な弛緩と、意欲を培う適当な弛緩との交互の節度は、自らを豊かにするものであります。「自ら、自由を制御することを学びえなかつた若者は不幸である。」というカントの言葉を噛みしめて下さい。そして、立派な十年を築き上げてこられた、長崎南高の皆さんの新しい十年への力強い歩みを願つて止みません。

希望者皆無の中から

大平 兼 男

それは、ひと昔前のことである。

私は当時、県教育庁指導主事として体育保健課に勤務していた。そのころ県立長崎南高等学校が新設されることになり、私は、それまで六年間行政の勉強をさせて頂いた経歴をこの新設校で精根こめて生かしてみたい、と決意した。昭和三十五年九月に内示があり、古川準備委員長・

堤事務長そして私と、教育委員会室で学校運営の諸問題を熱をこめて討議する日々が続いた。又、諸準備に汗を流さねばならぬ日々を重ねた。

いよいよ三月、三校合同の選抜試験が実施され、合格者の配分となった。私は注意して希望校の欄を見た。そして失望した。「長崎南」と書いてある生徒が皆無なのである。やはり伝統には勝てないのか、と思った。予想はしていたものの中には、歴然たる差があった。反面私は、「よし」という気になった。是が非でも背を向けた生徒を南に向けさせないではおくものか、と思った。配分も決定し、合格者のオリエンテーションを実施することになった。校舎は、突貫工事中。集める場所がない。新設の当事者の心には決意の襞を悲哀が走る。奔走してやっと中央公民館を確保することができた。

そこへ第一志望をねじ曲げられた生徒とその保護者が集った。委員長は力をこめて新設「南」の未来像について説いた。その説明には充分説得力があるように思えた。しかし、父兄は、すぐに質問の矢を浴びせた。「教材・教具は充分なのか」「理科の実験設備は、東・西にひけをとらないか。」「本当に先輩に太刀打ちできるのか。心配でならない」「私たちも子供たちも南を希望したのではないから、少しの差も許さぬ」など怒りを含んだような質疑ぶりであった。委員長は、涙を浮べて決意を語った。「三年後には、必ずや、南に来てよかった、南に入学させてよかった。と飲んで頂ける日が来ると思う。我々職員の情熱・気魄の結果するものを見守っていて下さい。」と結んだ。内示を受け、同席していた八人の教師もうなづき、固い決意に燃えていた。

入学式をひかえた、二日前、四学級分の机・椅子が長距離トラックによって運ばれてきた。その日はしのつく雨であった。豪雨に赤土の校道はぬかっていた。机・椅子の重みでトラックの車輪が目の前でのめりこんでいく。そして空回りをする。全員しのつく雨の中へ飛び出し、車を押し上げた。何度かめりこみ、何度か押し上げ、玄関前に着いた時は、全員びしょぬれであった。新設の仕事には、予想外の激しい仕事が続く

ている。予想外のことをわがこととして耐える時、新設の事業が一つ一つ確実なものになるのではなからうか。豪雨の当夜、机・椅子を守る本校当直第一号は田中正明君である。私の西高時代の教え子なので恩師の權威で宿直を強制した。独身であった彼は、不服そうではあったが引き受けた。翌朝は、ひとりで水びたしの廊下を掃除していた。

現在の職員室を仮の集会所にして入学式を行なった。生徒代表の言葉には、新設校をつくる決意があったので、あの東・西に対するコンプレックスはもう和らいだのか、と思った。

授業が始まった。さまざまの場面で、コンプレックスが和らぐどころか、心の奥深くこもって強いことが分った。我々教師にとっては、コンプレックスをどうしてとりのぞくか、ということが緊急の、根本的な課題であった。一年目に着任した教師の苦悩は何であったか、と問われたら、誰もがその課題をいうであろう。現在は、地方からもわざわざ南を希望してやってくる。十年の時間は無駄には過ぎなかったのだ。

すべてに張りつめているようではあったが、その中に和やかさもあった。私一人だけが担当する体育の授業にバスケット専門の梅田・バレー専門の田中重・田中正の先生達が加勢にきてくれていた。時折は、教師チームと生徒チームの親善試合を行なって心の交流を深めた。生徒数も少なかったが、生徒一人一人についてみんなの教師がよく知っていた。家族のことまで知悉していた。だから個人指導も行きとどいていた、と思う。

発足当初、もともと力を入れたのは、生活指導であった。妥協を許さぬ厳しさであった、と思う。生活指導がすべての生活の基礎であり、新設校の校風をつくるものは、生活態度の厳正である、という信念があったからである。うらめしく思った一回生も多かったようだが、洋服のたたみ方についても細い注意を与えた。そのような厳しい生活規制の中から本ものの「両立」を定着させて行こう、と考えた。

クラブ活動の中では、ラグビーにもともと力を入れた。ラグビーは、

高校に入ってきてはじめてやるスポーツである。スタートが同じだから、三年計画で指導したら、かならず優勝できる。何か一つ優勝することは、新設校の生徒に強い自信を植えつけることができる、と信じていた。素人ではあったが、私が初代顧問を担当した。幸い、部員に古川源蔵君や田中茂君など優秀な生徒が集った。練習熱心であった。折よく整地作業に来た竹松部隊の隊員の中にラグビーの専門家・樫村さんがいて、迷ってばかりいた一年部員に親切な手ほどきをしてくれた。夏には竹松へ行き、合宿をし、猛練習を重ねた。そのような下地のところへ名コーチ原先生を迎え、着々と実力をつけ、三年目の新人戦―正確には、昭和三十九年二月の県下新人戦において初優勝をとげた。

校長先生を中心に全員が手とり合い歓喜の涙を流した。狂喜した。あの日のことはいつもあざやかに甦ってくる。あのころは、休日でも全校あげての応援をしていた。あの優勝こそ汗と涙の結晶であった。南の可能性を如実に示すものでもあった。第一回生の卒業直前の優勝―これほど私達を勇気づけ、自信をもたせてくれたものはなかった。受験生もその自信をもって本校はじめての大学入試に臨んだ。はたせるかな、合格率は県下一であった。

南を下界から見上げるとき、いつも私の胸は感無量でいっぱいになるのである。南に栄光あれ。

在校生のみならずへ

平井 誠 一

長崎南高校創立十周年を心からお祝いいたします。十年といえればやはり一区切り、私たちの人生も、学校の生命も、ここで新しく考えなおし、よりよい発展を期する時であると思います。――(中略)――

思い出といえ、何といつても創立当時の悪戦苦闘です。雨が降れば、あたりはぬかるみと化し、風で傘もさせず、風の音で声をはりあげないと聞こえない。冬はみたこともないような霜柱、スクールバスを止めてしまう雪、山を削ってみるみるうちにグラウンドを作っていくブルドーザーはたいしたものだが、この機械の音もたいしたもの、第一回生として

入学してきた諸君の心身の苦労はなみたいていなものではありませんでした。何をやるにも、まず、「どうすればよいか」の研究からでした。しかし、初代校長の古川先生の御指導のもと、学習とクラブの両立をめざし、「気魄と情熱」を合言葉に、少しずつみんながまとまっていきました。正門をはいいた道路の両側に、一しよに汗を流した桜が、毎年春になると美しい花を咲かせるようになったし、体育館横の土手の松もずいぶん大きくなりました。久しぶりに一回生と出会ったりすると、運動場もなかった頃の学校の話から植樹の話となり、苦しかったけれどもよかった。というところに落ちていきます。

このような苦しみや、いろいろな作業を通じて、職員も生徒も、一人一人が、共に苦勞をしたという共通の実感を持っており、それが人間対人間のつながりを強めたのではないか、また、それが長崎南高校建設の基礎となったのであろうと思います。一時間、一時間の授業や諸行事にしても、生徒と先生、生徒同志といった人間と人間の心のふれあいなしには、とても成り立つものではないと、今さらながらつくづく感じます。長崎南高校の特色は、この心と心のふれあいにあるものと思います。また、これこそは、今後の学校の支えとなっていく最も根本的なものだと信じます。平凡なことですが、すけれども大事にしたいことです。一

現在、私は新しい職場で、歯車の一つになり得れば……と念願しつつ努力しているつもりですがなかなか思うようにはいきません。しかし、すべてのことに役に立つのが長崎南高校十年間の経験です。卒業生諸君の中にも、同じように感じている人が多々あることと思います。苦勞した経験はほんとうに役に立つものです。在校生諸君、友人とともに、先生方と一緒に苦勞をしてください。そこに、いろいろな悩みを解決する糸口が見つかるものです。私も卒業生と同じ気持で、長崎南高校の発展を見守り、祈っております。では、お元気で。

創立十周年記念誌「寄稿・旧職員」

昭和47(1972)・発行 より